研究

潮谷寺毛利家に関する記録

―昭和三十一年二月十一日 片岡氏書写せしを再録す―

資料提供　黒木豊文（会員　佐伯市大手町）

解読　佐藤巧（会員　佐伯市池船町）

浄修堂略記

《本文》

夫一切諸法従因縁起若有因無縁則不立有縁無因亦不成因縁和合而後成萬法故謂佛種従佛縁起台矣爰當寺不断念佛與基之濫觴者當郡鶴屋城主従五位下防州刺史毛利氏藤原高定君正徳四甲午冬十月朔日値於孺人源智院殿浄修了因大姉之不幸将盡進賛之至誠憑而所機發面也然亡室大姉之産者對劦侍従平義貞女也昔婚嫁干夫君閨室而鴛鴦衾重年偕老契追日濃者也野釋竊獲聴大姉平昔之行履貞節為室慈悲為床尋常敦於信三寶其重修精密難盡毛擧矣焉縁山前大僧正顕譽祐天者我家英雄遐代良導也大姉一ヒ拝之深伏テ彼師教化八萬法戸選入専修一門三心四修業堅収テ心腑爾来彫刻佛像親書妙経誦持具文之事因靡不向西方耳我佛謂高貴修道難矣大姉之今以察其往昔韋提同聴人歟即現婦女身歟不可測識而已獲病之日不以餘事係懐手持念珠瞻仰西方口唱念佛名臆念彌陀既至終焉合掌嘗不乱念佛数十遍如睡る気息忽絶矣至斃後顔如笑葬歛之間歴三日肌肉柔温而臭気都絶貫練重修之功其不可掩如是爰以太守君深謀於大姉平日之宿志且臆於斃後之遺辞新造営一宇仙閣更彫刻彌陀及観勢三躯而太守自法號同亡室大姉ノ法名使之投顕譽大僧正親書収干本尊之白毫與冉華之間荘厳已成安置今斯道場又應干太守之港顕譽僧正皆則正徳五乙未春二月二拾五円不断念佛遠於武陽麻布隠室開闢之彼勤行之撞木同真筆之名號併到来ス野衲即受之設供狼ノ席ヲ當斯時遠近ノ緇素如蟻集荷恩翟列羅綾袂ヲ結縁貴賤悲喜之涙交不流者鮮嗚呼寔創業垂統之功夫大哉仍資糧三十五斛永喜捨之一行三昧連綿而為期龍華之暁焉皆是察大姉生前没後光耀追薦之精誠如是乎雖尓太守君若佛乗無志則復何臻焉耶予伏窺於太守令光武備傳家兵略蓋邦徳生民功施社稷兼富和歌

道又宿値所感乎專敬於三寶以宗廟續絶霊區揚げ廢其餘善
状不遑瑣陳也可謂此武門良将雅家英才大裡妙好華者也曽
與顕譽僧正好故服其法楽受其安陀衣而珍襲之感味之彼師
亦称嘆太守芳志聊法蘊不吝故重堂頭額并棟梁ノ書更ニ望
之即諾而書與之太守君亦珍敬之餘雙立干僧正之現牌與自
之過現両牌道場欲於憑不断念佛巨益而満二世諸願且治國
安民之精誠佛陀之感應猶指掌而已矣今堂名浄修者因テ大

嶺雲山潮谷寺の浄修堂（下）と扁額（上）

姉道號謂也上来粗末記其旨要備後ノ不朽者也

岩正徳五乙未祀

雲山現住　明譽口称謹誌

《漢文読み下し》

それ一切の諸法は因縁より起こる。もし因あるも縁なくんば、すなわち立たず。縁ありても因なくんば、また成らず。因縁和合して後に万法を成す。故にいう、仏種は仏縁により起こると。

ここに当寺不断念仏與基の濫觴とは、當郡、鶴屋城主・従五位下防州刺史毛利氏藤原高定の君、正徳四甲午（一七一四）冬十月朔日、孺人源智院殿浄修了因大姉の不幸に値い、まさに進賛の至誠を盡くさんとし、よって機を発せし所のものなり。然して亡室大姉の産は對州（対馬）の侍従平義貞の女なり。昔、夫君の閨室に婚嫁して鴛鴦の衾に年を重ね、偕老の契り日を追って濃かなり。

野釈ひそかに大姉平昔の行履を聴くを穫たり。貞節を室となし、慈悲を床となし、尋て常に三宝を信ずるに敦し。その重修精密なること毛挙を盡くし難し。縁山（三縁山＝増上寺）、前の大僧正顕誉祐天は我家の英雄、退代の

良導なり。大姉一ヒにこれを拝し、深く彼師の教化に伏し、八萬法戸を選びで専修一門に入り、三心四修の行、堅く心腑に収め、爾来、仏像を彫刻、親ら妙経を書し、具文を誦持するの事により、西方に向かわざること靡し。我が仏は謂う、高貴の修道は難しと。大姉の今を以て、その往昔（前世）を察するに韋提（韋提希）同聴の人か、尊貴の家に生まれし人かが、すなわち婦女に現ぜし身か、測り識るべからざるのみ。病を獲るの日餘事を以て係わらず、懐手に念珠を持ち西方を瞻仰し、口に仏名を唱念し、臆に弥陀を念じ、既に終焉に至り合掌。嘗て乱れず念佛数十遍に満ち、睡るがごとく気息忽ちに絶ゆ。斃後に至り顔笑うがごとし。葬歛の間に三日を歴、肌肉柔温にして臭気都を絶つ。貫練重修の功、その掩うべからざること是のごとし。

ここに以て大守の君、深く大姉平日の宿志を謀り、かつ斃後の遺辞を憶い、新たに一宇の仙閣を造営し、さらに弥陀及び観勢三躯を彫刻して大守自らの法號、同じく亡室大姉の法名、これを顕誉大僧正に投せしむ。親書を本尊の白毫と冉華の間に収め、荘厳すでに成り今この道場に安置す。又大守の請に応じ、顕誉僧正皆すなわち正徳五乙未（一七一五）春二月二十五日、不断の念仏遠く、武陽麻布の隠室にこれを開闢す。

浄修堂御内仏（一光三尊善光寺如来）

かの勤行の鐘木、同じく真筆の名號あわせて到来す。野衲すなわちこれを受け、供養の席を設く。斯の時に當たり、遠近の緇素蟻のごとく集まり、荷恩の輩、羅綾袂を列す。結縁・貴賤・悲喜の涙を、交流さざる者鮮し。あゝ寔に創業垂統の功、それ大かな。すなわち資糧三十五斛、永く喜捨の一行三昧の連綿として龍華の暁を期せんため、ここに皆これ大姉生前没後の光耀を察し、追薦の精、誠に是の如きか。なんじ大守の君と雖も、もし仏乗に志無くん

ば何ぞここに臻らんや。予は伏して大守の令光を窺い、武備・傳家の兵略、けだし邦徳は生民に被り、功は社稷に施さんと。兼ねて和歌の道に富み、また宿値の所感か専ら三宝を敬い、宗廟を以て絶えたる霊区を続け廃（絶）を揚ぐ。その余の善状は瑣陳に遑あらざるなり。武門の良将というべく、雅家の英才、大裡の妙好華なり。かって顕誉僧正と好み故に、その法薬を服し、その安陀衣を受け、これを珍襲感味す。彼の師もまた大守の芳志を称嘆し、いささかも法蘊を吝まざる故に、重堂の頭額、ならびに棟梁の書、

毛利高慶公御夫妻の位牌

さらに望めば即諾して書しこれを与う。

大守君また珍敬の餘り僧正の現牌、自らの過現、両牌とを道場に雙び立て、不断念佛の巨益に憑りて二世の諸願を満さんと欲す。かつ治国安民の精誠、弥陀の感応、なお掌を指すがごときのみ。

今、堂を浄修と名づくは、大姉の道号に因んでいうなり。上来粗、その旨要を記し、後の不朽に備るものなり。

　　時正徳五乙未（一七一五）祀

　　雲山現住　明誉口称謹誌

右この一冊、住僧明誉がこれを記すに就いて、永く浄修堂に収め置くものなり。

正徳五乙未（一七一五）毛利周防守　高定（花押）

《大意》

もともと一切の物事のことわりは、因縁により起こるといわれている。因があっても縁がなければ事は起こらず物事は成り立たない。因と縁とが一緒になって初めて成り立つのである。

このことから、悟りを求める事も仏の導きにより、自然

と起こるものであるという。

ここに記す潮谷寺の不断念仏堂の始まりは、正徳四年（一七一四）の冬、十月一日、六代藩主毛利高定（高慶）公が奥方、源智院殿（おこん様）の死に逢い、深く回向の気持ちを表すべく一念発起したものである。

亡くなったおこん様は、対馬の領主宗義真の娘で、高定にとついで仲むつまじい生活を続けてきた。

私は、ひそかにおこん様の日常の様子を聞くことができた。貞節を守り慈悲の心を持って進んで三宝（仏・法・僧）を敬い、その様子は他に見ることが出来ないものであった。芝増上寺の先代祐天大僧正は、わが寺でも有数の優れた僧であった。

おこん様は、祐天大僧正のもとに毎日のように訪れ、師の教えに感動、数多くの教えの中から専修念仏の教えに共感し三心四修の願いを胸にひめて、仏像を刻み、親しく写経し、毎日経文を唱え、回向する事を欠かさなかった。

阿弥陀如来は、高貴の人が佛道に親しむのは難しいとおっしゃっている。おこん様の生前の行動を思うと、前世は、古代インドのマガタ国の王妃か、それとも共に教えを受けた人か、あるいは王家の人か、仏の生まれ変わりか、窺い知ることができない程である。

病を得てからは、懐手に数珠を持ち、西の空を仰ぎ見、口に念仏を唱え胸に弥陀の姿を念じつつ、決して乱れる事なく数十編の念仏の後に眠るがごとく亡くなられた。お顔には笑みさえ残していた。

葬儀は三日を要したが、遺体に傷みも臭いも感じさせなかった。これも信仰を重ねた功徳の賜物であろうか。

高定公は、おこん様の生前の願いを思い、死後の望みに応えるべく一堂を建立し、弥陀三尊（阿弥陀如来・観音・勢至の両菩薩）を彫刻し、高定自身の法号とおこん様の法名を顕譽大僧正より受けとり、また書を白毫と苒華の間に収め美しく飾って仏像を安置した。

これは正徳五年（一七一五）二月二十五日の事である。御堂には高定公の求めにより、私明譽が顕譽大僧正から江戸の念仏堂で使用していた撞木、真筆の名号を譲り受け開眼供養の席で披露した。この日、遠近の僧俗の人々が蟻のごとく集まり、貴賤を問わず結縁を願う者すべてが感激の涙を流したという。まさに後世に伝えるべき偉業である。人々は資糧三十五石を喜捨し一行三味（専心念仏）が永遠に続くことを願った。

私は、人々が何ゆえにおこん様の生前から死後までの光明を想い、このような追善の誠を尽くすのか。高定公に一切衆生の成仏を願う心が欠けていたとしたら、このような成果を生まれただろうか。疑問に思う。

私は、武備・伝家の兵略の中に高定公の威令を感じる。高定公の人徳は広く良民に及び、社稷に寄進し、歌道にすぐれ、養生を願い、もっぱら三宝を敬い、先祖の霊廟を篤く守る等々、その善行は数えるに暇なく治の武門の名将というべき人である。雅の道にも通じ偉大なる信心者でもある。

高定公は顕譽大僧正と交遊を持ち、仏法が人々を救うと言う考えに共感し、その安陀衣を戴いて愛用した。師もまた高定公の芳志を称賛し、佛の数多くの教えを惜しまず伝えた。そのためか公の求めに応じて浄修堂の頭額と棟木の書の揮毫を快く引き受け与えたのである。

高定公は、僧正への尊敬の余り僧正の現牌と公の戒名を記した二つの牌を堂に並べ一定期間念仏を唱え続けた。

このような行動は、佛の大きな御利益に頼り、来世へのもろもろの願いを果し、治国安民の誠を願う公の考えによるものである。弥陀と心が通じ合う如くであった。

いま御堂を浄修と名づけるのは、おこん様の道号、源智院殿浄修了因大姉に因んだものである。

ここにその概略を記し、後世に永く残すこととする。

正徳五乙未（一七一五）年祀る。

嶺雲山第十二世住職明譽が口述筆記する。

右の一冊は、当寺の住職明譽がこれを記したので、永く浄修堂に収蔵して置くものである。

正徳五乙未（一七一五）年

毛利周防守高定（高慶）花押

【語注】

○濫觴　物事の初めをいう。

○刺士　州の長官。

○孺人　妻をいう。高定妻琨子婦人。

○閨室　寝室、奥。

○婚嫁　えんぐみする。

○鴛鴦の衾　夫婦がいっしょに寝る夜具。

○偕老の契　夫婦の固いちぎり。

○野釈＝野僧　いなかの僧。
○平昔　むかし。ふだん。
○行履　おこない。
○毛挙　細かい事まで数えあげること。
○縁山　三縁山増上寺。
○重修　重ねて編集する。
○遐代　偉大な。
○専修　浄土教で極楽往生をとげるために称号念仏の行を一心に修めること。
○瞻仰　仰ぎ見る。
○斃後　死後。
○観勢　観音菩薩と勢至菩薩。
○白毫　仏の額にあって光を発し、無量の国土を照らすという毛
○冉華　頬のひげ状の模様。
○武陽　江戸。
○開闢　ひらく。
○野衲　僧侶の自称。
○緇素　黒と白。僧侶と俗人。
○羅綾＝綾羅　上等の絹。
○垂統　基盤を後世に残し伝える。
○喜捨　よろこんで寺に寄付したり、貧者に施しをすること。
○龍華＝龍華会　四月八日の潅仏会をいう。
○光耀　ひかりかがやく。
○精誠　誠心誠意。
○社稷　土地の神と五穀の神。転じて国家。
○宿　星座「二十八宿」
○三宝　仏・法・僧
○妙好華　浄土教の篤信者をいう。
○安陀衣　三衣（中宿衣・内衣・下　衣）の一つ。下着や作業着とする。
○法蘊　法を積むこと。
○現牌　生存中の位牌。
○明誉　嶺雲山潮谷寺第十二世住職。
○毛利周防守高定　六代藩主高慶の前名。